

論文

幼稚園年長児サマースクールの企画と実践 (1)
—自己評価指標の結果から—野 田 さとみ
野 崎 真 琴

1. はじめに

保育者養成においては、保育に関わる知識を学ぶとともに得た知識をいかに実践に結びつけるかが課題となる。「教職実践演習」は2006年7月11日中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」の提言を受けて、2008年11月に教育職員免許法施行規則が改正され設置された。また、保育士養成課程においても「保育実践演習」が2010年度の入学生から設置された。どちらも科目の到達目標として、保育に関する課題についての問題意識、保育者としての問題解決力・判断力の習得が掲げられ、保育者養成課程における学びを科目横断的とらえ実際の保育実践と結びつけることが課題となる。授業内容としては、模擬授業や役割演技（ロールプレイング）等、様々な方法が提案されており、各養成校で工夫を凝らし実施されている。

本研究では「教職実践演習」の実践課題の一つとして実施した「年長児サマースクール」の企画・実践について検討した。この課題は、保育内容や発達などを中心としたそれまでの学びを基盤として、目的を達成するために討議し、複数の保育者が連携をとって保育を行う行事の企画・実践を体験することを通して、組織の一員として行動する役割や責務、問題に臨機応変に対応する判断力等を養うことを目標としている。4月から7月末までの約4か月間の活動を通して得られた学生の学びと課題について、授業開始時と授業終了時における自己評価指標の結果から検討することとした。

2. 年長児サマースクールの概要

「年長児サマースクール」は、附属 T 幼稚園年長児が短期大学へ来校し保育科学生との交流をする行事として、毎年7月末に実施している。T 幼稚園では幼稚園の夏休み行事の一つとして、年長児のみを対象とし以下の3項目を主なねらいとして設定している。

- (1) 公共交通機関を利用し、地域の様子に関心を持つ。

(2) 友だちと助け合い協力しながら行動し絆を深める。

(3) 名古屋柳城短期大学の学生との交流を楽しむ。

一つ目のねらいについては T 幼稚園の立地に起因する。T 幼稚園は附属幼稚園ではあるが短期大学から 30km 離れた場所に位置する。そのためあえて年長児の課題として電車とバスを乗り継いだ移動を年長児に体験させたいとの保育者の思いから設定されたものである。子どもたちは短大の位置やの行き方、交通費などについても家族に相談するなど友だちと一緒に公共交通機関で移動することへの期待を高めるようである。二つ目のねらいについては、子どもたちはこの日はクラスではなく 8 人程度の小グループが編成され、各グループには担当教諭がつき、園から短大の移動や短大での行動はこのグループを基本として行動する。普段生活を共にしているクラス単位ではなく、小グループの仲間と移動や短大や幼稚園での活動を通して協力し合う経験となるよう計画されている。また三つ目のねらいについては、プログラムに参加することを通して普段は関わることのない短期大学の学生との交流が目的となっている。

幼稚園教諭免許取得のための「教職実践演習」と保育士資格取得のための「保育実践演習」は、お互いに読み替えることができるため、本学でも「教職実践演習（幼稚園）」として両科目の内容を習得できるよう設定している。「年長児サマースクール」の実践はこの科目における 4 月から 7 月の課題の一つとして設定された。学生は上記の幼稚園における活動のねらいを理解し、以下の 3 項目を学修目標として活動に取り組んだ。

(1) 行事に応じたねらい・内容について集団で討議をすることができる。

(2) 実施の流れについて保育者としての配慮事項を検討し計画を立案し実践することができる。

(3) 各々の役割を意識し他者との協力体制を取ることができる。

一つ目のねらいについては、5 歳児の 7 月という発達や時期を踏まえたうえで、活動のねらいや内容をメンバーで協議をしながら詳細に考えることを課題とした。保育内容をはじめとする保育科における学びを踏まえ、活動の意味やねらいについて仲間とともに検討することは、職員会議を模擬的に体験することを目的としている。二つ目のねらいについては、「年長児サマースクール」において短大で実施するプログラムはすべて学生主導で行なうため、実施に当たって保育者として配慮すべき事項を、やはり仲間とともに検討し立案・実践することを課題とした。また、三つ目のねらいについては、計画した内容を 17 名の学生で役割分担し連携を取りながら実践することを課題とした。学生は 6 月の授業の空き時間を利用して事前に幼稚園を訪問し、園児と直接触れ合うことを通して年長児

の年齢や集団の特徴を理解するよう努め、具体的な計画作成に臨んだ。学生が計画した主なプログラムを含むサマースクールの内容を図 1 に示す。学生プログラムについては、基本的に学生主導で実施し、引率教員はプログラム中においては補助的な役割をすることとした。

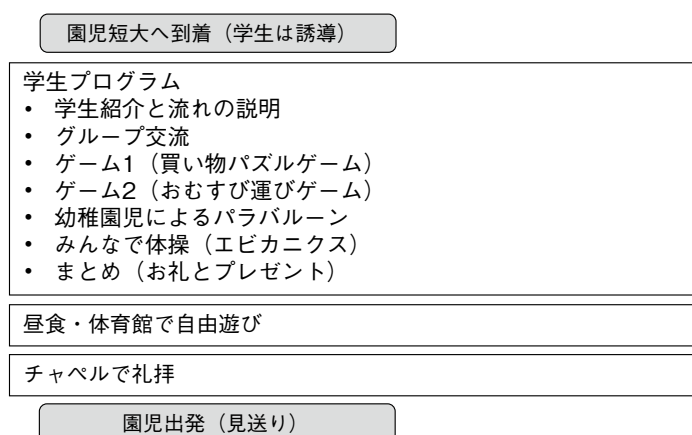


図 1 年長児サマースクールの内容

3. 方法

3.1. 対象及び実施期間

2018 年度「教職実践演習」のプログラムのうち、「年長児サマースクール」は 4 月から準備を開始し、7 月末の当時までの約 4 か月間で取り組んだ。受講生のうち「年長児サマースクール」の企画実践を課題とした学生は 17 名であった。また、参加した園児は 49 名、引率教員は 8 名であった。

3.2. 自己評価の指標と評価の方法

自己評価については、保育実践にかかわるグループワーク（表現活動）の学びを分析する際に使用した（野田，2018）3 種類の指標、一般性自己効力感尺度（坂野・東條，1993）、保育者効力感尺度（三木・櫻井，1998）、社会的スキル（菊池，2007）のを利用することとした。本研究における課題は、4 か月間という長期的見通しが必要となること、保育という場面を想定した実践であること、他者との調整や協力が必要とされる実践であることから、これらは今回の課題に対する学びの分析に有効であると考えた。各指標の概要については以下のとおりである。

① 一般性自己効力感尺度

「自己効力感（self-efficacy）」は Bandura によって提唱されたもので、「個人がさまざまな場面において、自己の行動の遂行可能性についてどのような見通しを持って行動を生起させているかの目安」とされる（坂野・東條，1986）。見通しをもって計画実践に臨むことが求められることから、本研究の課題との関連があると考えた。この尺度は本来 2 件法で回答する形で作成されたものであるが、表現活動の実践を検討した先行研究（金城ら，2015）と同様に他の尺度に合わせて 5 件法で回答を求めた。

② 保育者効力感尺度

保育者効力感は、保育という特定場面における自己効力感を測定することを目的として作成された指標である（三木・桜井，1998）。本研究の課題についても、子どもの年齢や興味を考え、保育者の立場で子どもたちを把握し行動することが課題とされるため、保育者としての意識の育成との関連性を検討することが出来ると考えた。

③ 社会的スキル尺度

これは対人関係スキルを円滑にするために身に着けるスキルである社会的スキルを測定する尺度（菊池，2007）である。グループで活動することで、この社会的スキルとどのように関連するのかを検討することを目的として使用した。

各指標の項目については、それぞれ「非常にそう思う」（5 点）から「全くそう思わない」（1 点）の 5 件法で回答することとした。自己評価の記入は、授業開始時の 4 月と実践後の 7 月の 2 回行い、4 月と 7 月の各尺度の得点について比較検討を行った。

4. 結果および考察

各自己評価指標の質問項目において、授業開始時及び前期終了時の得点について対応のある t 検定を行った。

一般性自己効力感尺度について、4 月と 7 月の平均点と標準偏差を表 1 及び図 2 に示す。4 月時の平均点は 2.65 ± 0.98 点、7 月の平均点は 2.80 ± 0.92 点であり全体としては授業前後に有意な差は認められなかった。16 項目の授業前後を比較した結果、③「友人より優れた能力がある」（ $t=2.89, p<0.05$ ）、⑦「何かをするとき、うまくゆかないのではないかと不安になることが多い（逆転項目）」（ $t=3.39, p<0.01$ ）、⑫「友人よりも特に優れた知識を持っている分野がある」（ $t=2.39, p<0.05$ ）の質問で得点が上昇、⑨「人より記憶力がようほうである」（ $t=2.38, p<0.05$ ）で減少した。③・⑫の結果から、グループ活動を通して

自分の得意な分野を活かすことができたとの手ごたえがあったと考えられた。⑦の結果からは、実践を経験することで漠然とした不安が軽減されたのではないかと考えられた。また、⑫の結果から、チームでの実践は自分の役割を把握し適切に動かなければならないことが求められ、流れを把握し次を予測して行動するなど記憶しなければならない事項が多く、それらを自分の課題としてとらえた傾向があったのではないかと考えられた。

表1 4月及び7月における自己効力感尺度の得点及び標準偏差

	自己効力感	4月 (SD)	7月 (SD)	
①	何か仕事をするときは、自信を持ってやるほうである。	3.41 (1.06)	3.53 (0.87)	
②	過去に犯した失敗やいやな経験を思いだして、暗い気持ちになることがよくある。	2.53 (0.94)	2.18 (0.73)	
③	友人より優れた能力がある。	2.06 (0.83)	2.71 (0.77)	*
④	仕事を終えた後、失敗したと感じることの方が多い。	2.82 (0.73)	2.56 (1.09)	
⑤	人と比べて心配性なほうである。	2.06 (1.00)	2.47 (1.33)	
⑥	何かを決めるとき、迷わず決定するほうである。	2.59 (1.00)	3 (1.06)	
⑦	何かをするとき、うまくゆかないのではないかと不安になることが多い。	1.82 (0.81)	2.76 (1.03)	**
⑧	引っ込み思案なほうだと思う。	2.76 (1.15)	3.12 (1.27)	
⑨	人より記憶力がようほうである。	2.59 (1.00)	2.18 (0.73)	*
⑩	どうやったらよいか決心がつかずに仕事にとりかかれなことがよくある。	3.12 (0.70)	2.76 (1.03)	
⑪	結果の見とおしがつかない仕事でも、積極的に取り組んで行くほうだと思う。	3.29 (0.77)	3.06 (0.75)	
⑫	友人よりも特に優れた知識を持っている分野がある。	2 (0.61)	2.65 (1.06)	*
⑬	どんなことでも積極的にこなすほうである。	2.94 (0.90)	3.35 (0.70)	
⑭	小さな失敗でも人よりずっと気にするほうである。	2.71 (1.10)	2.71 (1.21)	
⑮	積極的に活動するのは苦手なほうである。	3.12 (1.05)	3 (0.94)	
⑯	世の中に貢献できる力があると思う。	2.65 (1.00)	2.71 (0.92)	
	平均得点	2.65 (0.98)	2.8 (0.92)	

注：②④⑤⑦⑧⑩⑭⑮は逆転項目

** p<0.01

* p<0.05

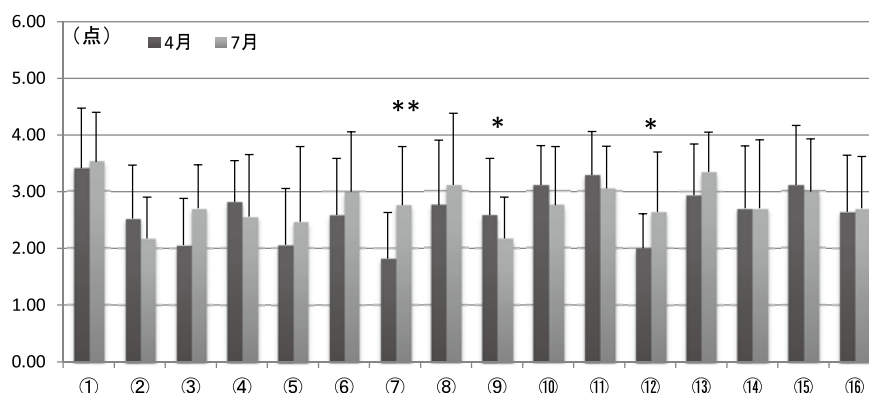


図2 4月及び7月における自己効力感尺度の得点及び標準偏差

保育者効力感尺度について、４月と７月の平均点と標準偏差を表２及び図３に示す。４月時の平均点は 2.76 ± 0.86 点、７月の平均点は 2.97 ± 0.95 点であり授業前後に有意な差は認められなかった。１０項目の授業前後を比較した結果、②「私は、子どもの能力に応じた課題を出すことができると思う」($t=2.50, p<0.05$)、⑨「私は、一人一人の子どもに適切な遊びの指導や援助を行えると思う」($t=2.58, p<0.05$) の質問で得点が上昇した。この結果から、子どもの年齢に合わせた活動内容の選択や一人ひとりへの援助を行うことについて、この活動を経験することで自信を持てるようになったと考えられた。

表２ ４月及び７月における保育者効力感尺度の得点及び標準偏差

	保育者効力感	４月 (SD)	７月 (SD)	
①	私は、子どもにわかりやすく指導することができると思う。	2.65 (0.70)	2.82 (1.01)	
②	私は、子どもの能力に応じた課題を出すことができると思う。	2.47 (0.80)	3 (0.87)	*
③	保育プログラムが急に変更になった場合でも、私はそれにうまく対応できると思う。	2.71 (0.92)	2.88 (0.99)	
④	私は、どの年齢の担任になっても、うまくやっていけると思う。	3 (1.00)	3.12 (1.05)	
⑤	私のクラスに問題があったとしても、うまく対処できると思う。	2.47 (0.80)	2.59 (0.80)	
⑥	私は、保護者に信頼を得ることができると思う。	2.76 (0.83)	2.82 (1.01)	
⑦	私は、子どもの状態が不安定な時にも、適切な対応ができると思う。	2.76 (0.97)	3.06 (0.90)	
⑧	私はクラス全体に目をむけ、集団への配慮も十分できると思う。	2.82 (1.07)	2.88 (0.86)	
⑨	私は、一人一人の子どもに適切な遊びの指導や援助を行えると思う。	2.76 (0.66)	3.35 (1.00)	*
⑩	私は、子どもの活動を考慮し、適切な保育環境（人的、物的）に整えることに十分努力できると思う。	3.18 (0.81)	3.18 (1.01)	
	平均得点	2.76 (0.86)	2.97 (0.95)	

* $p<0.05$

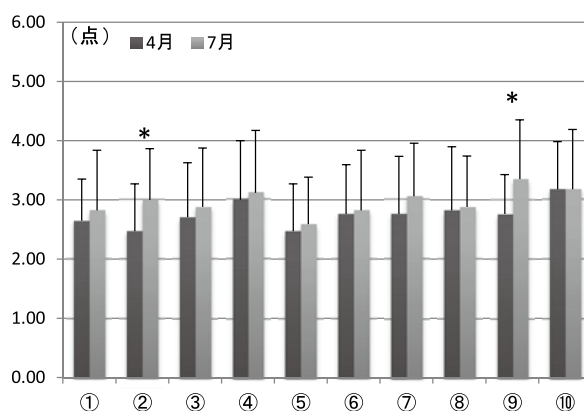


図３ ４月及び７月における保育者効力感尺度の得点及び標準偏差

社会的スキル尺度について、４月と７月の平均点と標準偏差を表３及び図４に示す。４月時の平均点は 3.21 ± 0.98 点、７月の平均点は 3.21 ± 0.92 点であり授業前後で有意な差

は認められなかった。16 項目の授業前後を比較した結果、⑯「何か失敗した時にすぐに謝ることができますか」($t=2.70, p<0.05$) の質問で得点が減少した。この結果から、仲間と協力するにあたって葛藤する場面もあったことがうかがわれた。

表 3 4 月及び 7 月における社会的スキル尺度の得点及び標準偏差

	社会的スキル	4 月 (SD)	7 月 (SD)	
①	他人と話していて、あまり会話が途切れないほうですか。	3.18 (1.01)	3.12 (1.11)	
②	他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか。	2.94 (0.83)	3.06 (0.75)	
③	他人を助けることを上手にやれますか。	3.59 (0.94)	3.71 (0.69)	
④	相手が怒っている時に、うまくなだめることができますか。	3.29 (0.85)	3.24 (1.20)	
⑤	知らない人でも、すぐに会話が始められますか。	4.06 (1.03)	3.88 (0.86)	
⑥	まわりの人たちの間でトラブルが起きても、それを上手に処理することができますか。	3.06 (0.83)	3.06 (0.90)	
⑦	こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか。	2.65 (1.00)	2.65 (0.70)	
⑧	気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか。	3.18 (1.13)	3.12 (1.17)	
⑨	仕事をするとときに、何をどうやったらよいか決められますか。	2.94 (0.83)	3 (0.79)	
⑩	他人が話をしているところに、気軽に参加できますか。	2.88 (0.86)	2.71 (1.16)	
⑪	相手から非難されたときにも、それをうまく片づけることができますか。	2.88 (1.32)	3 (1.17)	
⑫	仕事の上で、どこに問題があるかすぐに見つけることができますか。	2.76 (0.66)	3.06 (0.97)	
⑬	自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか。	3.29 (1.21)	3.71 (0.85)	
⑭	あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか。	2.82 (1.07)	2.76 (0.90)	
⑮	初対面の人に自己紹介が上手にできますか。	3.35 (1.32)	3.59 (0.62)	
⑯	何か失敗した時に、すぐに謝ることができますか。	4.41 (0.80)	3.94 (1.09)	*
⑰	周りの人たちが自分とは違った考えを持っていても、うまくやっていけますか。	3.41 (1.18)	3.29 (0.92)	
⑱	仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうですか。	3.12 (0.86)	2.82 (0.73)	
	平均得点	3.21 (0.98)	3.21 (0.92)	

* $p<0.05$

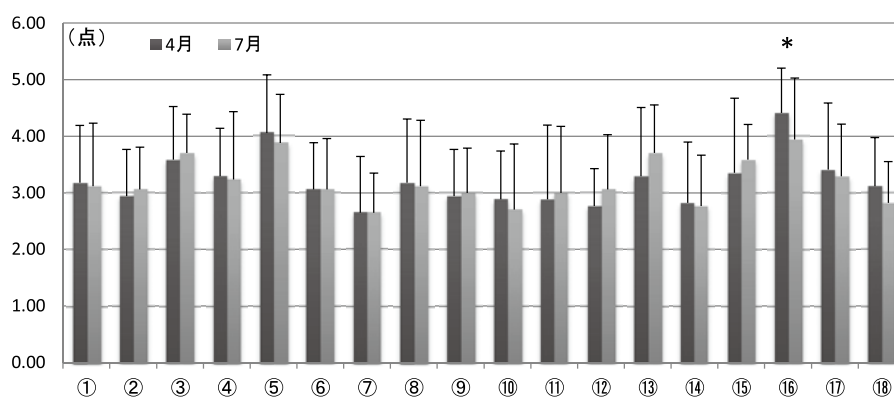


図 4 4 月及び 7 月における社会的スキル尺度の得点及び標準偏差

これら3つの指標の結果をもとに、今回の学生の学修目標から活動の学びについて考察を試みる。

まず一つ目のねらい「行事に応じたねらい・内容について集団で討議をすることができる」について、保育者効力感尺度の結果から、「子どもの能力に応じた課題を出すことができる」の項目の得点が上昇したことから、「ねらい・内容の設定」について対象の年齢や特徴が実践を通して意識されるようになったことがうかがわれた。保育者養成課程における教職実践演習の実践研究において香川ら（2013）が、「発達段階に関する知識や子ども一人一人を理解することといった保育者の専門性と一体になった発表能力」の育成の重要性を示しているように、保育実践において発達段階や個々の子どもの理解を常に意識することは常に課題とされる。また、1年生に幼稚園での教育実習、保育所での保育実習、このサマースクールの準備期間中の5月に2回目の教育実習を各2週間経験しており、それまでの各学生の経験を持ち寄り今回の内容を検討することで、より発達に応じた内容であるかどうかを考察する機会となっていたと思われた。

二つ目のねらい「実施の流れについて保育者としての配慮事項を検討し計画を立案し実践することができる」については、保育者効力感尺度の「一人一人の子どもに適切な遊びの指導や援助を行えると思う」の項目の得点が上昇したことから、今回の活動を通して内容に適切な援助を意識できるようになったと思われた。しかし一方で、保育者効力感尺度における「子どもに分かりやすく指導できる」「急にプログラムが変更になった場合でも対処できる」「子どもの状態が不安定な時に適切な対応ができる」「集団への配慮も十分できる」など、今回の活動内容に関連があると思われるその他の項目において顕著な変化は見られなかった。これらはより高い保育指導力に関するものと思われ、1回の実践において修得は難しい項目であるとも考えられる。これらは養成課程で修得することができるわけではないが、保育者としての実践力を高めるためには重要な視点であることから、実践後の振り返りや集団討議等を通して意識的に取り上げていくことが課題となる。教職実践演習では省察の重要性も指摘されていることから（村井ら、2018）、実践後の学びを深める方法については今後も検討が必要であると思われる。

三つ目のねらい「各々の役割を意識し他者との協力体制を取ることができる」については、一般性自己効力感尺度における「友人より優れた能力がある」「友人よりも特に優れた知識を持っている分野がある」の得点が上昇したことから、個々がグループの中で自分らしさを発揮できる体制がとれていたと考えられた。今回の活動は総合的な活動であった

ため、それぞれが自分の得意分野で力を発揮しそれをお互いに認め合う関係が出来ていたようである。一方で同じ一般性自己効力感尺度の「人より記憶力がようほうである」の項目、社会的スキル尺度における「何か失敗した時にすぐに謝ることができますか」の項目の得点は減少した。前者は準備も含め実践内容が複合的であったために情報を把握しきれず上手いかなない場面に数多く出会ったことをうかがわせる。後者も上手いかなかった場面における反省点を自己課題として意識されたためと考えられた。しかし一般性効力感尺度「何かをするとき、うまくゆかないのではないかと不安になることが多い」の得点が減少したことは、これらの体験を積み重ねていくことが、保育者としての自信につながると思われた。

5. まとめ

本研究では「教職実践演習」の実践課題の一つとして実施した「年長児サマースクール」の企画・実践について3つの自己評価指標を用いて検討した。その結果、計画や実践については明確な課題をもち学生それぞれの特性を生かして取り組むことが出来ていたことが示された。その一方で、他者との連携に関しては多くの葛藤を経験したことがうかがわれた。本研究では授業開始時と授業終了時の自己評価を用いたが、実践後の振り返りを丁寧に行うことが保育実践には求められる。そのため、今後は実践後の振り返りの記述を分析することを通し、学生の学びと課題についてより詳細に検討していきたい。

付記

この論文は、2018・2019年度名古屋柳城短期大学奨励研究費による研究成果の一部として、第3回日本保育者容積教育学会（東北福祉大学）にて2019年3月2日にポスター発表された原稿に加筆をした。

参考及び引用文献

- ・中央教育審議会, 2006, 「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）.
- ・野田さとみ, 2018, 「保育者養成における総合的表現活動の実践（2）—自己評価指標の結果から—」, 名古屋柳城短期大学紀要第40号, 5-12.
- ・坂野雄二・東條光彦, 1986, 「一般性セルフエフィカシー尺度作成の試み」, 行動療法研究第12巻第1号, pp.73-82.

- ・三木知子・桜井茂男，1998，「保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響」，教育心理学研究第46巻第2号，pp.203-211.
- ・星野命，1970，感情の心理と教育，児童心理，24，pp.1445-1447.
- ・金城悟・佐藤隆弘・花輪充・井戸裕子・笹井邦彦・細田淳子・大澤力・水野智美・徳田克己，2015，「保育養成短期大学における総合表現型授業の教育効果」，東京家政大学研究紀要第55集，pp.23-30.
- ・香川 晴美・鈴木 正和・伊藤 潔志，2013，保育者の専門性としての発表能力とその育成——「保育・教職実践演習」を核とした科目間連携に向けて——，山陽学園短期大学紀要第44巻，8-19.
- ・村井尚子・坂田哲人，2018，保育職への実感をもたらす省察の営みに関する一考察～教職実践演習における実践例から～，京都女子大学発達教育大学紀要第14号（2），29-36.

Planning and Practice the Summer School for Final Year of Kindergarten (1): The Results of the Self-evaluation Indices

Noda, Satomi* Nozaki, Makoto*

本研究では教職実践演習の実践課題の一つとして実施した「幼稚園年長児サマースクール」の企画・実践について、学生の学びと課題を自己評価指標の結果から検討した。

自己評価の指標には、「一般性自己効力感尺度」「保育者効力感尺度」「社会的スキル尺度」「自尊感情尺度」を使用した。結果は、「一般性自己効力感」の「友人より優れた能力がある」の得点が有意に上昇、「保育者自己効力感尺度」の「私は保護者に信頼を得ることが出来ると思う」、「社会的スキル尺度」の「気まずいことがあった相手と、上手に和解できる」の得点が優位に減少した。これらは、活動を通して自己の能力を活そうとした一方で、課題が具体的になったためと考えられた。

キーワード：幼稚園年長児，教職実践演習，自己効力感，保育者効力感，社会的スキル

*Nagoya Ryujo Junior College

